

資料紹介

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	13
号	4
ページ	71-72
発行年	1996-12-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006317

前山 隆「エスニシティとブラジル日系人：文化人類学的研究」お茶の水書房、1996年、xvii+503ページ

本書は著者のこれまでの日系ブラジル人に関する著作の一部をまとめたものである。文化人類学の理論的な問題を考察する学術専門書であるが、ブラジルにおける日系人の内面に関心を持つ一般の読者にとっても有益であろう。

本書によれば、一攫千金目的の出稼ぎという意識を持っていた日系移民は敗戦を契機にブラジル社会の構成員として永住する決断をしたが、完全同化を目指したわけではなく、逆に日本的な、宗教、「家」意識などを持ち込んで、エスニック・アイデンティティを強く持った。社会上昇の戦略として高い教育を受けた子孫も、文化的に完全にブラジル化したわけではなく、エスニシティを強く残している。

異文化への継続的な接触が必然的に同化を促すと考えるモデルでは、このような状態は否定的な見方がなされるのであろう。しかし、実態は必ずしもそのような単純な過程を辿るわけではないようである。一方で国籍のうえでは日本人であることを捨てて、ブラジル人としてのナショナル・アイデンティティを求めながら、他方で日系人というエスニック・アイデンティティを強めることは、適応の戦略としては決して矛盾するものではないということなのであろう。

(浜口伸明)

López Murphy, Ricardo ed. *Fiscal Decentralization in Latin America*. Washington D.C. Inter-American Development Bank, 1995, 297p.

昨今さかんに議論されている域内の分権化過程に

ついて、政府間財政関係に焦点を当て、経済学的手法から接近した比較研究の成果である。第1章では研究の概要（仮説、理論的枠組、目的）を整理したのち、4カ国比較の結果を鳥瞰する。続く第2章から5章ではアルゼンチン、チリ、コロンビアおよびペルーの事例の実証分析をそれぞれ行なっている。

分権化概念は本論文集では「財政的連邦主義」と同義で扱われている。中心命題は、公共財の提供をどのレベルの政府（中央、州、市郡等）が管轄し、そのための税収配分をどのようにすれば経済的効率性の高い行政能力が達成されるか、という点にある。各事例において行財政構造の制度的側面について考察したのち、財政支出、および用途配分構造を各政府レベルでの統計データに基づいて分析している。各国の財政分権化過程を概観する上で有益である。さらに全体の分析時期が1970年から92年（一部予測を除く）に限定されており、読者にとって横並びの比較を十分可能たらしめる論文集である。冒頭で触れられているように、歴史的に連邦体制が強いアルゼンチンと中央集権体制が根強いその他の国々とは政治構造上の初期条件が異なる。各国の政治体制上の改革過程に関する論考と合わせて本書を読めば域内の分権化過程の全貌に対する理解がより深まるだろう。

(幡谷則子)

堀坂浩太郎・細野昭雄・長銀総合研究所編『ラテンアメリカの企業論：国際展開と地域経済圏』日本評論社、1996年、186ページ

ラテンアメリカにおいては1980年代から90年代にかけて、かなり徹底した経済自由化政策が実施され

た結果、経済活動の担い手である企業のあり方に大きな変化が生じている。本書は、そのような変化の中でも特に注目される民族系民間企業の多国籍企業化という現象に焦点をあてて、その実態を分析したものである。

取り上げるのは、この現象が特に顕著なメキシコ、ブラジル、アルゼンチン、チリのラテンアメリカ主要4カ国であり、加えて、比較の対象としてNIEs、ASEAN 諸国の民族系民間企業の対外直接投資の実態も紹介されている。

企業への訪問調査などで得た資料をもとに、この10年間の民族系民間企業をめぐる経済環境の変化とそれへの企業の側からの対応が個別具体的な事例を盛り込みながら紹介されており、企業のレベルまでも視野に収めたラテンアメリカ経済の分析がきわめて少ない現状において、貴重な成果といえよう。

(星野妙子)

黒田悦子「先住民ミへの静かな変容：メキシコで考える」(朝日選書556)朝日新聞社 1996年 240+ivページ

20年という歳月は、人々の生活を変容させるに充分な時の流れだ。メキシコのオアハカ州のミへ高地、アユトラ村の人々の生活は、過去20年間に、大きく変容した。本書の筆者である文化人類学者、黒田悦子氏は、1970年代にこの村に2年住み、フィールド調査を行っていた。20年後の今再び、当時の知人たちを訪ねた筆者は、彼らと対話し、再び生活をともにすることによって、人々の生活がどのように変容していったのか、考察してゆく。

第二章「出稼ぎと移住」では、伝統的居住区を離れ都市部へ出稼ぎ・移住していったミへたちのアイデンティティの変化を、第三章「市の拡大と民族商人の成長」では、交通網の発達等の社会的要因がミへ商人の発展に与えた影響をそれぞれ考察する。

第四章「二つの台所・二つの食生活」では、市場の変化が、人々の食生活に与えた影響を探る。

第五章「女も変わる」では、村の女性達の意識や共同体における社会的立場の変化が描かれる。教育浸透や、出稼ぎ等による異文化体験により、女たちの世界は広がり、徐々に社会進出も進んできているようだ。

第六章「宗教戦争」では、セクト(福音主義的プロテスタント)の進出で、伝統的なカトリックとの対立が顕在化している様子が描かれる。

第七章「変わる祭り」では、ミへ高地の守護聖人の祭りの様式の微妙な変化を探る。

本書の最終章、第八章「民族運動の始動」では、1970年代と90年代との人々の民族意識の違いを考察する。90年代の今日、ミへ居住地域で生活する人々がミへとしての民族意識を強く持っているかというところではなく、むしろ70年代のほうが、国立先住民局が積極的に推進していたミへ地域の統合化・発展政策が影響して、地域の一体感が強かったようだ。90年代の今日、メキシコ先住民の生活は依然厳しく、多くの場合、人々の意識は村単位にとどまっている。

ともあれ、本書で描かれているとおり、歳月は確実にミへの人々の生活を変えている。その変化が、文化人類学者である筆者によって、克明、かつ身近に感じることができ、おもしろい。(村井友子)